変わらぬ軽快さ　使い勝手を向上

何度でも「やり直し」

アンドゥ　リドゥ　主要画面で実装

■アンドゥ・リドゥ　直進化した。

前の操作を取り消すアンドゥ、そのアンドゥを元に戻すリドゥ機能。メーンのレイアウト画面はもちろん、他の主要画面でも実装した。メーン画面のアンドゥのみだった旧版から大きく

失敗操作を取り消せるのはもちろん、いったんレイアウトを変えた組み直した紙面を元に戻してみたり、やっぱり最新状態に復活したり…。何度でも試行錯誤を繰り返すことができる。

実装したのは記事および見出し、画像、ノンブルの各編集画面。回数はメモリの許す限り無制限だ。

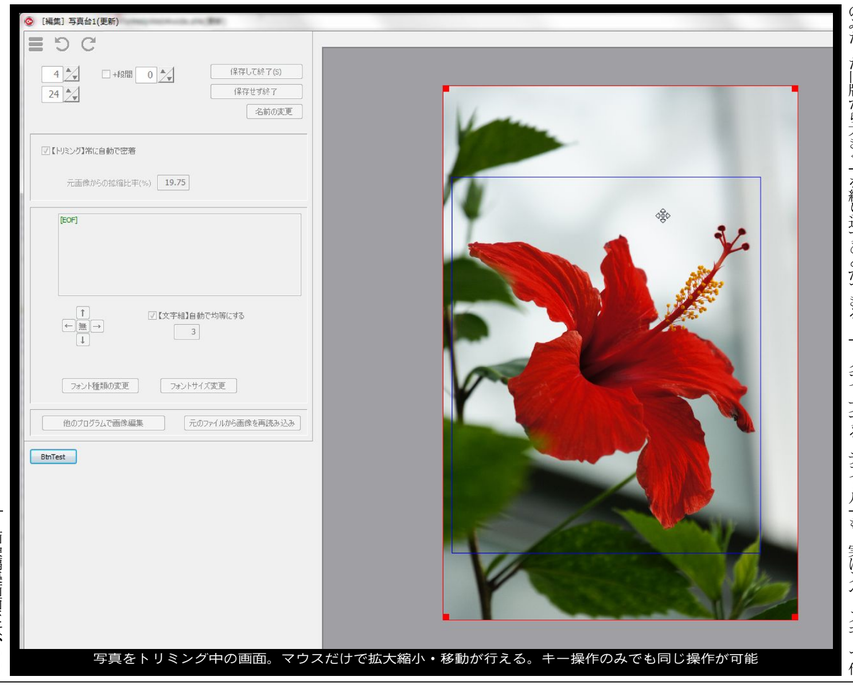
■自動バックアップ　紙面を上書き保存する際、自動的に前回の保存状態をバックアップする。デフォルトでは、過去5回分まで履歴を遡ることができる。

紙面データを保存したフォルダ内にBackupフォルダを自動生成するため、特に指定しなくてもバックアップされていく。

■お手軽スペースキー　レイアウト紙面上で素材や空白部分を選んで［実行］ボタン。これがこのソフトの最も基本的な操作だが、実行ボタンまでいちいちマウスを持って行かなくてもスペースキーで代用できる。このため、マウスと併用すると快適で素早い操作が可能となる。

■素材グループ化　見出しや記事等は、一つのボックスに表示するように変更。種別ごとにアイコンが付く。

素材のグループ分けにも対応。いちいち「○○の記事」などと名前を付けなくても、グループ別に素材をまとめておけばデフォルトの名前のままでも迷わないだろう。



写真をトリミング中の画面。マウスだけで拡大縮小・移動が行える。キー操作のみでも同じ操作が可能

最大400% 美しく拡大

紙面の拡大表示は、最大で400%になった。美しく拡大される。

原寸、横／縦いっぱい、縦横自動判別拡縮に加え、200%、400%表示にも一発で切り替えが可能に。指定ボタンは、通常のドロップダウンのほか、クリックで次々と切り替わる回転式。右クリックで逆回転する。

縦横自動判別拡縮では、ウィンドウ自体のサイズを変更すれば拡縮比率も同時に変わる。もちろん任意の拡縮比率指定も可能。最小10%から1%刻みで設定できる。

紙面の一部を瞬時に拡大する「一発拡大」機能は200%がデフォルト値。紙面に割り付けられた状態で記事の中身の確認もしっかりできる。

紙面全体に原稿用紙風の升目を表示。全体のイメージがつかみやすくなった。升目は画面右側のボタンでオンオフが可能。

シンプル路線 新UI

メーン画面および記事エディタ、見出し作成編集画面、画像編集画面でボタン類の配置や名称をほぼ共通化。

またユーザへの通知や問い合わせはVISTA以降の新ダイアログを採用。よりわかりやすく丁寧になった。

フォントの選択や見出しの地紋設定、紙面の拡大表示指定など、さまざまな場面では「回転式プルダウンボタン」を採用。クリック、右クリックで次々と切り替えられる。（「7」のエクスプローラのファイル表示切り替えボタンと同じ方式）

パソコン画面の横長化が進む中、編集画面をできるだけ大きくするため上部のメニューは廃止。メニュー表示ももちろん可能だ。

ショートカットキーも極力共通化。たとえば見出し・画像・記事・箱組の編集中にCtrl+Sで保存終了できる。

ワープロ等で一般的な単位ポイント（Pt）だけでなくミリ、さらに新聞業界で使われる「倍」「U」「ミルス」も使用可能になった。

明治以来の日本の新聞の伝統的単位である「倍」は紙面の基本文字サイズが大きくても小さくても、見出しの「倍」をそろえれば以た体裁を維持できる。見出し編集画面では、初期値ではこの「倍」を使用する。もちろんPtや他の単位に切り替えられる。

「倍」基本 U・ミルスも

1000分の88ミリ、Uはその8分の1。つまり1倍＝8Uとなる。ミルスは1000分の1ミリ。

ただしソフト上では「倍」は紙面の記事サイズとの比率を指す単位として使う。

見出し作成では、主・脇の基本的な日本見出しから、一本見出し、頭ありの三本見出しなど二通りのパターンを事前に選べる。

各見出し文の文字組や大きさも標準的な指定済み。あとは文字数を合わせて打ち込むだけで新聞らしい体裁の見出しが完成する。もちろん、いったんパターンを選んだ後でも、見出し文の削除や追加、文字大きさの変更も可能だ。

ただし一般的な新聞の見出しは文字数制限が厳しく、慣れてない場合は文字数合わせのはなかなか大変。厳しい文字制限の中で日々、見出しをひねり出す編集記者の気分を味わうのも一興かも。もちろんどうにも文字数が減らせない場合は、文字サイズを小さくすればよい。

箱組も同様に大きさに合わせて基本的なパターンを準備。形が決まっている場合は、面倒な紙面設定抜きでいきなり編集に入れる。

見出しパターン用意

プリンタ用紙 合わせて拡縮

プリンタが拡大・縮小印刷に対応していない場合で

プリンタ未対応の大きさの紙面でも用紙に合わせて縮小印刷できる

も、用紙に合わせて拡縮して印刷する機能が追加された。

方法はメニューから［誌面の特殊な印刷］→［プリンタの用紙サイズに合わせて印刷（拡大・縮小）］を選ぶだけ。たとえばA3紙面を編集中に、A4サイズを選べば、自動的に縮小して印刷される。もちろん任意の拡縮比率指定も可能。最小10%から1%刻みで設定できる。

文字効果を追加

グラデーションや任意の斜体

見出しの各種効果がパワーアップした。地紋や色付けのほか、グラデーション効果が追加された。斜体には任意の角度を付けることも出来る。

グラデーション効果は背景にも文字にも付けられる。方向も左右・天地から計4種類。

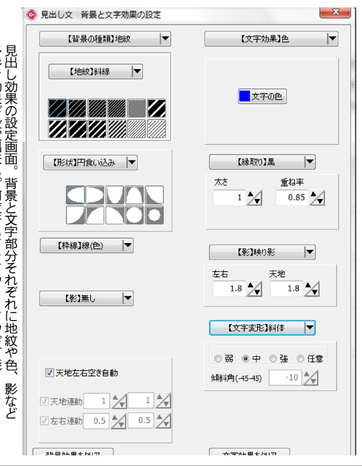
地紋も縦線・横線・斜線・渦といった一般的なパターンを準備。ただし近年の新聞の「地紋離れ」を反映して種類は旧版とあまり変わらない。

地紋の形状も四角や楕円のほか、台形、円の貨い込みなどをパターンから選べる。

お気に入りのパターンがあれば、名前を付けてテンプレートとして保存しておくとよい。見出し作成画面で簡単に呼び出せる。

斜体は、フォントが持つ斜体情報ではなく、ソフトウエア的に変形する。このため、傾きの角度を強・中・弱から選べ、こまかく1度単位で指定もできる。

また、文字の縁取りに「重ね率」指定を追加した。縁同士が重なるまで文字を接近させればばより迫力ある効果が出せる。



見出し効果の設定画面。背景と文字部分それぞれに地紋や色、影など多彩な効果が設定出来る。何度でもアンドゥ・リドゥが可能

紙面素材表示 グループピング

素材リストは大きく進化した。グルーピングにより、記事と見出し・写真類をひとつのグループとしてまとめられる。多数の記事を配置する、あるていど本格的な紙面を作成する場合に便利だろう。

グルーピングのもうひとつの利点は、いちいち素材に詳しい名前を付けなくて済むこと。たとえば「トップ」というグループを作成しておけば、写真は「P」、記事は「記事」、見出しは「みだし」という風に、単純な命名でも迷いにくい。

グループの作成や変更も簡単。素材作成時にグループを作成・指定することもできるし、後から既存のグループに組み込むのも自在だ。すべて右クリックメニューから「名前の変更」で呼び出せる専用画面で指定できる。またグループ名の変更も手軽に行える。グループ名を省略すると自動的に無名のグループになる。

罫線は13種類

好みのカラーに

罫線は、細線や二本線、点線などあらかじめ13種類のパターンを準備した。それぞれ好みの色も付けられる。

設定画面は罫線を引くと同時に表示される。いったん引いてからの編集が必要だった旧版と比べ、手間が減った。数字キーでパターン番号も一発設定可能。

もちろん、いったん引いた罫線は、ダブルクリックで何度でも再編集できる。また、天地の空きも細かく設定できる。天地いっぱいの、いわゆる"仕切り罫"だけでなく、天のみ、あるいは地のみを仕切りにしたり、天地で異なる空き指定可能だ。

リード組 自動分割

リード組の作成方式ががらりと変わった。

まずリード部分を事前に単独の記事にする必要はない。作成時に自動的に最初の段落が分割され、リードになる。

行間も適切な値が自動的にセットされる。不自然に広すぎたり、逆に狭くなってしまうことはない。

リードの作成操作も、アンドゥで元に戻せる。この際、2本に分割された記事も自動的に1本に戻る。

配置や移動 手軽に

マウスでもキーでも

画像編集画面では、PCにインストールされた好みの画像編集ソフトを呼び出せ、編集結果を即座に反映する。色調整やサイズ変更など、事前に準備していなくても、このソフト上からの操作で完結する。編集結果は、取り込み元の画像には影響を与えないので、失敗しても読み込み直せる。

■キーで前後左右に　紙面上での素材は従来通りマウスドラッグで移動できるが、矢印キーでも移動可能。段方向（縦組み紙面なら上下）はCtrlキーと同時に押すことで文字単位で移動する。

■縦横一気に拡縮　見出しや画像の紙面上での直接拡縮は以前は縦横それぞれ行う必要があったが、一気に拡縮可能になった。たとえば見出しの左下をドラッグして縦は長く横幅は短くするこもマウスドラッグで一回で出来る。

■組版情報の自動解釈　たとえば紙面上の見出しや画像を専用画面で編集したついでに、幅も小さくした場合。機械的に左側に移動するのではなく、見出しの右側に罫線があれば自動判別して右による。写真が紙面の左端にあれば、自動的に右側に小さくなる。このように組版情報を解釈して、可能性の高い方に自動で修正する。

■1億画素でも　スマホカメラの高機能化で数百万画素は当たり前、インターネットでは1億画素を超える高精細画像が公開され、自由に使えたりする時代。そうした大きな画像でも重さを感じさせず、描画やトリミングなどの編集も比較的軽くこなせる。ただし最初の画像取り込みや印刷には時間がかかる。

抱え畳み・置き流し…

基本を網羅 新聞操作

記事と見出しを一気に配置する「抱え畳み」など、新聞組版の基本機能もパワーアップした。

記事・見出し・写真の3種類を一度に配置するなど、より複雑な抱え畳みも可能になった。写真は2枚まで対象。記事・見出し・メン写真とサブ写真の4素材を一気に畳める。

また旧版では一時的に実装されていた「置き流し」も復活。見出しを右側に配置すると同時に、記事を流す。

もちろん、記事を途中から畳む「流し畳み」も従来より簡単。素材作成時にグループを作成・指定することもできるし、後から既存のグループに組み込むのも自在だ。すべて右クリックメニューから「名前の変更」で呼び出せる専用画面で指定できる。またグループ名の変更も手軽に行える。グループ名を省略すると自動的に無名のグループになる。

通り可能。実行の際には、畳み開始段と終了段を太線で表示し、より直感的な操作が可能になっている。記事を選択すると同時に、畳み開始位置を示すピンマークが同時に描かれるため、即座に畳み・流し畳み操作に入れる。

PNGやベクタ画像

画像の対応種類は以前のBMP、JPEGに加え、PNG、GIF画像が加わった。

さらにベクタ画像であるEMF（エンハンスドメタファイル）が扱えるようになった。ベクタ画像の利点は、拡大・縮小してもほとんど画像の品質が落ちないこと。ロゴや図形、グラフなどで使われることが多い。

なお、この紙面でも、ソフトのスクリーンショットをEMFファイルに変換して使用している。JPEG等のラスタ画像と比較すると、拡縮による劣化がないど防げる。

EMFは、市販の高機能DTP系ソフトだけでなく、フリーソフトウエアでも作成・編集できる。また、エクセルやワードで作ったグラフや図形などは、特別なソフトを使わなくても、EMFとして取り出すことが出来るようだ（作者は試したことはない）。

ルビ 用途で使い分け

ルビ（振り仮名）には2種類あり、用途により使い分けできる。

ひとつは「まとめルビ」。

国宝の八橋蒔絵螺鈿硯箱（やつはしまきえらでんすずりばこ）は尾形光琳の作である

右の例のように、複数の文字にルビを振った場合、まとめルビは漢字とルビが対応しない。ただ組版の体裁としては美しく、本文が読みやすい。こちらが標準の方法だ。

もう一つは「個別ルビ」。

国宝の八橋蒔絵螺鈿硯箱（やつはしまきえらでんすずりばこ）は尾形光琳の作である

右のように、漢字とルビがきちんと対応する。教育目的などはこちらが適しているかもしれない。ただし、場合によっては本文の文字と文字が離れ、やや読みにくくなったり、1行当たりの文字数が減り、結果として行数が増えることもある。

〈b〉太字〈/b〉HTML風

太字やゴシック等の文字修飾には、HTMLに似たタグを採用。自分でブログやホームページを作っている人には馴染みやすいと思われる。

たとえば記事や見出し等の一部を太字にする場合は〈b〉太字にする文字〈/b〉とHTMLと全く同じにすればよい。

ゴチックなら〈g〉異竹にする文字〈/g〉とする。

主なタグには[Ctrl+B]で太字処理などショートカットキーが割り当てられ、記事、見出し、写真編集、ノンブル編集のそれぞれの専用画面で共通。

なお記事の改行は段落の先頭にある全角空白で自動判断する仕様はこれまでと同様だが、全角空白がなくても改行する専用のタグも準備。文末に〈br〉を打てば次行からこのように改行される。

「禁じ手」色付け警告

新聞紙面には、やってはいけない「禁じ手」がある。そうしたケースの場合、色付け表示で警告する。

最もまずいのは「まぜごぜ」。上から流れてきた2以上の記事が、同じ段の同じ場所に流れ込んでしまうことを指す。完全に〝欠陥品〟。ただ、慣れないうちは紙面をあれこれいじっている間にやりがちでもある。この場合、すかさずまぜごぜになっている記事を色付けする。

「泣き別れ」も避けなくてはならない。つまり、ある段落が段の先頭から始まっている場合、どっちの記事の続きか分からない流し方だ。これは意図せず起こるが、やはり色付けされる。

また記事が紙面に入りきらない「記事あふれ（オーバーフロー）」ではあふれた行数分が赤く表示される。旧版では記事全体が赤くなったが、どのでいあふれているか直感的に分かるようになった。

このPDFは営利非営利問わず自由に使用できます。
改変は不可です。詳しくはCC3.0を参照してください。
CC BY ND